

『大学研究』第40号の刊行にあたって

筑波大学大学研究センターの紀要『大学研究』の刊行も今号で40回を数えることになる。第1号が1988年であるから、26年間で平均すると年約1.5回刊行してきたことになる。巻末に掲載している編集規定には、「毎年1～2号を原則として発行する」とされていることから、ほぼその方針に沿って刊行してきたことになるが、最近では発行ペースが落ちてきている。センター長である自身の責任と重く受け止めている。

確かに、最近の大学は教員も職員も忙しい。国立大学の場合、法人化されて以降、その傾向が強いと言われているが、国立に限ったことではなく、日本の大学全体に言えるように思われる。その一方で、教育と研究という大学の基本的な機能については、一層の高度化が求められている。特に、当センターは研究面でその成果を示していかなければならない。第40号の刊行を機に、その使命をあらためて深く胸に刻み、次の節目である第50号に向けて、研究のさらなる高度化に努めていきたい。

ハーバード大学の経営学者であるマイケル・ポーター教授の「5つの脅威」に擬えれば、日本の大学も、18歳人口、基礎学力、就業構造、国家財政と家計所得、グローバル競争という5つの脅威に晒されており、多方面から改革を強く迫られる状況にある。企業であれば、5つの脅威を、競争優位を確立する機会と捉え、自力で組織革新を行って生き残りを目指すところだが、幸か不幸か、大学にはあれこれと世話を焼いてくれる取り巻きが多い。各種の答申や提言も進むべき方向性を示してくれる。しかしながら、最後は個々の大学自身の見識と洞察に基づき、将来の方向性を定め、何が必要な改革なのかを見極めた上で、着実に歩を進めていくしかない。

そのために、当センターが為し得る貢献とは何か、また、『大学研究』をどのような特徴を有した研究論文集として発展させていくべきか、この機会にしっかりと考えてみたいと思う。

『大学研究』に貴重な論文をお寄せいただいた執筆者の皆様とお読みいただいた皆様に心からの敬意と謝意を表し、第40号刊行にあたっての挨拶とさせていただきます。

平成26年3月

筑波大学大学研究センター長
吉 武 博 通